

ソロスとヘッジファンド

今年のダボス会議は先週開催されたが、焦点の気候変動問題についての米国のトランプ政権と欧州側の考え方の違いが際立った。トランプ大統領も演説をしたが米国の優位性や政策の正しさをアピールするだけのトランプ流を存分に発揮した。これに噛みついた者の一人が、ジョージ・ソロスだ。

ソロスはヘッジファンドの代名詞とも言える人物で市場関係者の間では有名だ。株を中心のヘッジファンドからスタートしたが、為替でも大きなポジションを張り、市場に影響を与えた。特に 90 年代前半の欧州通貨危機のなかでのポンドのショートポジションは大成功を収めた。BOE（英国中央銀行）を打ち破った男としてメディアでも大々的に取り上げられた。その後アジア通貨危機でもタイバーツ、マレーシアリング、香港ドルなどでショートポジションを張った。円でも何度かポジションを張ったが、私の知る限り上手くいってなかった。

最近ではBREXITの賛否を問う国民投票の時に久々にポンド売りを仕掛けて市場をにぎわせたが、大分前から慈善事業家としての顔の方に重きを置いていた。民主化、グローバル化、自由化を推進するため、中東欧やロシアなどでの活動の支援、大学の設立や講座のスポンサーなどにもなった。

しかしナショナリズムやポピュリズムが政治や社会に浸透するにつれてソロスへの風当たりが強くなり、ソロスの活動も制限が加えられ窮屈になった。ダボスでの演説では、ナショナリズムやポピュリズムの台頭を厳しく批判すると同時にトランプ大統領をこき下ろした。

ソロスのヘッジファンドはマクロ系と呼ばれるもので、政策のゆがみを突くものだ。間違った政策の下での市場のレートは本来あるべくレートに収れんするとの考えだ。そこに彼の正義があった。欧州通貨危機の時などまさにそうだった。ソロスにとってトランプ政権の政策は財政政策など間違いだらけと考えているはずだから、本来なら大きなリスクを取るチャンスのはずだ。

ダボスでのソロスの演説にはどこか敗北感が漂っていた。それはトランプの政策に対してポジションを取ったがうまくいかなかったのか、80 歳代の高齢になりポジションを取るのがしんどくなったのか、ナショナリズム・ポピュリズムの潮流が抗しがたいと痛感しているのか、それはわからない。

ただ近年のヘッジファンド全体のパフォーマンスは芳しくない。ここ 2 年間は資金の流出が続いている。儲かってもインデックス（S&Pなど）に負けてしまう。

市場で儲けた莫大な資金を慈善事業に動じてきたソロスが復活する姿を見たいものだ。